絵本を通して異世代交流を考える（その２）

エルサ・ベスコフの絵本研究②
『ちいさな　ちいさな　おばあちゃん』の猫の行方

美谷島（びやじま）　いく子
Ikuko BIYAJIMA

はじめに

スウェーデンの絵本作家エルサ・ベスコフ（1874―1953）は、最初の絵本“Sagan Om den Lilla Lilla Gumman（ちいさな　ちいさな　おばあちゃん）”（図１）を1897年、23歳の時に描いた。その絵本は、母方の祖母（Johanna Wilhelmina Fahlstedt）から幼い時に初めて聞いた、「繰り返し言葉の昔話」を元に描かれた。エルサ・ベスコフは、生涯に33冊の絵本を描いたが、この最初の絵本は、シンプルで短いが、その原点となる重要なものと思われる。

英語版は、1988年に“The Tale of the little, little old woman”（図２）としてFloris Books社より絵本として出版された。

日本へは、1968年２月に小野寺百合子氏が同人誌「蜂」７号に、「レンゲセンへの旅」という絵本と一緒に「小いさな、小いさなおばあさんのはなし」として翻訳している。しかし、その翻訳は、絵本としては出版されなかった。2001年９月に、石井登志子氏の翻訳で、偕成社から絵本『ちいさな　ちいさな　おばあちゃん』（図３）として出版された。本論文では、石井氏の訳を使用する。

スウェーデン語版、英語版、日本語版で表紙が違い、日本版は大きさも原版と異なり小さい。

1897年出版されたこの絵本では、おばあちゃんが搾ったミルクを飲んでしまった猫は、「森へ逃げていってしまって、もう帰ってきませんでした」で終わっている。しかし、50年後に出版された絵本では、「でもね　やっぱり　そのうちに　おばあちゃんちへ帰ったと思いますよ　エルサ・ベスコフ」と付加した（図４）。

その50年間に描かれた他の絵本の中に、猫がしばしば登場する。これらの絵本の中に猫はどのように描かれているかを探ることにより、エルサ・ベスコフの絵本の特質を考えたい。

猫の行方

1　1898年　“Barnen på Solbacka（おひさまがおかの子ども達）”の「勉強の時間」の頁の黒板に猫らしきものが描かれている（図５）。「牧場で」の頁では、牛乳を搾っているおばあさんが描かれている。

2　1905年　『花のうた』Jeanna Oterdahl詩　KATTFÖRTTERNAS VISA（エゾノチチコグサ）の子どもが、猫を抱く（図６）。HOS MOR MALENA（マレーナばあちゃん）登場。
1905年　『なきむしぼうや』最初の頁（男の子が泣いている）の枠の左上の角（かど）の猫（図７）。
最後の頁（男の子が笑っている）の枠の左上の角（かど）の猫（図８）。

3　1912年　『ペレのあたらしいふく』暖炉の横の椅子に座り、ペレの毛をすいているおばあちゃんの横に猫がうずくまる（図９）。ミルク皿を持ったもう一人のおばあちゃん（図40）。

4　1916年　“Görans bok（ヨーランのノート）” Rismormor（図10、11、12）がちいさなちいさなおばあちゃんのモデルとなる。
緑おばさん、紫おばさん、茶色おばさんと犬も登場。

5　1918年　『みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさん』緑おばさんが子猫を干草小屋で見つけ、抱いて梯子を降り連れ帰る（図13）。テーブル上の白い皿で子猫はミルクを飲む（図14）。子猫はおばさん達の家で暮らすことになりエスメラルダと名づけられる（図15）。

6　1925年　『ちゃいろおばさんのたんじょうび』エスメラルダは、表紙（図16）や茶色おばさんの部屋など４場面（図17、18、19、20）に登場。猫は白い皿でミルクを飲む。

7　1927年　『いちねんのうた』一週間の水曜日に少女が、クリームをかき混ぜてバターを作る横に、後ろ向きの猫（図21）。11月、暖炉の火が燃えている部屋の緑の布団の上に黒猫。

8　1929年　『ペッテルとロッタのぼうけん』（図22）エスメラルダが３匹の子猫を生む（ムッル、クッル、ミッセ）（図23）。ムッルは家で飼う。エスメラルダとムッルは茶色おばさんの台所の隅（図24）が気に入る。ミッセはベアタに、クッルはクリスチィンばあさんにあげる。

9　1942年　『あおおじさんのあたらしいボート』燕の墓（図25）とおじさん帰還の場面（図26）で猫登場。

10　1945年　“ABC resan（ABCの旅）”（図27）。Bo（男の子）とAnna（女の子）がスウェーデン語の29の文字を旅する絵本の中で、KがKatten（猫）（図28）。

11　1947年　『ペッテルとロッタのクリスマス』表紙（図29）や台所（図30）、クリスマスツリーを飾った居間（図31）など８場面にエスメラルダとムッルが登場（図32、33、34）、茶色のミルク皿でミルクを飲む。双子の家に黒猫。

このように見てくると、33冊中、幻想的な作品ではなく、写実的な作品11冊に、猫は登場してくる。猫はおぼろげから明確に、周縁からストーリーの中心に、脇役から主役へと変化して登場し、すっかり家族の一員として家に住み着き、自由に振舞いミルクを飲んでも追い出されることは無い。

祖母と孫

Elsa Beskowの祖母（写真35）は、旧姓（Johanna Wilhelmina Bergstrom）と言いStockholmの商人のAnders Gustaf Fahlstedt 家の女中だった。Elsaの母親Augustaが９歳のときに祖父母は結婚した。寡婦となってからも、祖母は Södermalm にある広々とした庭付きの大きな家に住み続けた。

その家で、1874年２月11日に Elsa Beskow は生まれた。1875年に祖母の破産により家族はその家を去ることになった。しかし、Elsa Beskow の想像の中ではその家の幸福な記憶は続き、Elsa（写真36）はその家で祖母から初めて聞いた昔話を絵本にした。

小野寺百合子氏も外交官夫人としてスウエデーン滞在中は、上３人の子供は日本に残さざるをえなかった。彼女の翻訳家としての出発は、孫の誕生と死を契機に、50代半ばであった。Elsa Beskow が孫に絵本を読んでやっている1938年頃の写真（写真37）が自伝にある。又 Elsa Beskow の息子で画家の Bo（1906－）が、Elsa Beskow が孫と並んで椅子に座り、お話をしてやっている

油絵（図38）を1937年に描いている。

祖母と孫は、忙しく、気ぜわしい母と子よりも、ゆったり、ゆっくりした時間を過ごせる。そのゆっくりした関係の中から、豊かな児童文学が生まれた幸福な事例を、ここに二つみることが出来る。

ちいさなちいさなおばあさんとは誰だろうか。Elsa Beskowは、イースターの市場で出会ったRismormor（小枝売りのおばあさん）（図10、11、12）をモデルにしたと述べている。年取っていても自立して働いているあばあさんとして“Görans bok”に歌われている。

『花のうた』の中の、小さな家に一人で住み、一日中機織をし、夕方は花の世話や読書をして暮らすHOS MOR MALENA（マレーナばあちゃん）（図39）とも共通する。

猫は、人間に愛情を求め過ぎる訳ではなく、自立したやり方で凛としているので、自立したおばあさんと一緒に住むのにふさわしいと思われる。

昔話を昔話絵本へ

なぜ「最後の言葉」を付加したのであろうか。先にも述べたように、この昔話はエルサ・ベスコフが幼い時祖母から椅子の周りで聞いて、一緒に口ずさみ楽しんだ、繰り返し言葉が元になっている。“Lilla Lilla”, “Liten Liten”, “Litet Litet”（小さな、小さな）などという繰り返しが多く、韻を踏んでいるところもあり、耳で聞くと快く感じられ、ストーリーが早いテンポで進んでいく昔話である。

処が、この繰り返し言葉の昔話を10場面の絵本にすると、耳から聞いたり、一緒に口ずさんでいた時には気にならなかった結末が気にかかるようになった。

例えば、15頁では、異時同図法で、猫が三回描かれている（図41）。又、猫が森へ逃げていってしまった「最後の頁」（図４）で、「小さな小さな猫」と言っていたものが、手前につき出た太い松の枝上に、おばあさんよりかなり大きな猫として、丸い画面の中央に描かれ（参考文献(4)）、おばあさんがはるか遠くで前掛けを目に当て泣いている姿が描かれている。同じ木の枝にいる猫を描いた挿絵に『ルイザおばさんのわらべ歌の本』の梅の木に登った猫（図42）や、『不思議な国のアリス』のクルミの木に登って笑っているチェシャ猫がある（図43）。これらを比べてみると私やアリスは手前に居り、小さなおばあさんの位置と逆であり、この絵の特徴が分かる。絵本を読んでもらったり、手にとってみた読者である子供はその絵が心に残り、猫の行方が気になることにエルサ・ベスコフは気付き、ずっと心に引っかかっていたと思われる。

それ故に、前述のように50年間に描かれた絵本の中に猫をしばしば登場させてきたのだろう。

エルサ・ベスコフは、1986年にストックホルムで開かれた英国のウォルター・クレーン展を見てこの絵本の着想を得たといわれる。

この絵本は、ジャポニズム、アールヌーボーの影響も受け、左ページが白紙で、右側の丸い画面の中のみに絵が描かれ余白が多い。現実の世界とは違う「昔々あるところ」に起こったことを巧みに表している。読者は、その小さな丸い世界をのぞき見るのである。

具体的には、丸い画面を囲む植物（ゼラニウム、クローバー、金せん花、白樺、猫柳、松毬）の装飾模様（図３）が特徴である。

終わりに

エルサ・ベスコフと同じ頃日本で、イギリスのウォルター・クレーンの絵本“Flora's feast”

（花の祭り）の影響を受けて子供の本に絵を描き始めた人に、清水良雄（1891－1954）がいる。清水は、夏目漱石門下の鈴木三重吉の依頼で1918年に、「赤い鳥」の創刊号の表紙をはじめ「コドモノクニ」「キンダーブック」に描いた。彼は、絵本を作りたいと志ながら、結婚しても子供を持たず孤高の人生を送り、一冊の絵本も作れなかった。

エルサ・ベスコフは、６人の子供を育てながら一人一人の子供のために絵本を描き、100年以上経った今でもその絵本は出版され世界中の子供たちに読まれている。

今後、エルサ・ベスコフの絵本における「雪解けばあさん」や『おりこうなアニカ』の小さなおばあさんの意味や、イギリスの昔話「３匹の熊」などにおける小さなおばあさん（「銀の髪と金の髪」）との関連を調べていきたい。

参考文献

（１）“Elsa Beskow En BIOGRAFI”, Stina Hammar Albert Bonniers Förlag 1958.

（２）“Sol-ägget Fantasi och Verklighet I Elsa Beskow Konst”, Stina Hammar Albert Bonniers Förlag 2002.

（３）“Elsa Beskow　Vår Barndoms Bildskait”, National Museum, Stockholm 2002.

（４）『スウェーデン民話』（ローン・シグセンとジョージ・ブレッチャー編　米原まり子訳　青土社）の中にある「小さなおばあさん」では、ほら話、迷信、語呂合わせに分類されている。小さな猫は巨大な猫になっている。（Aarne-Thompson 型目録＃2016）。

（５）『猫のフォークロア』キャサリン・M・ブリッグズ著、アン・ヘリング訳、誠文堂新光社 1983年

（６）夏目漱石著『我輩は猫である』の装丁は、ウイリアム・モリスやウォルター・クレーンの影響を受け、明治の装丁界に革命をもたらしたと言われる。その下編に橋口五葉がコップの水を飲んでいる黒猫の挿絵を描いている。

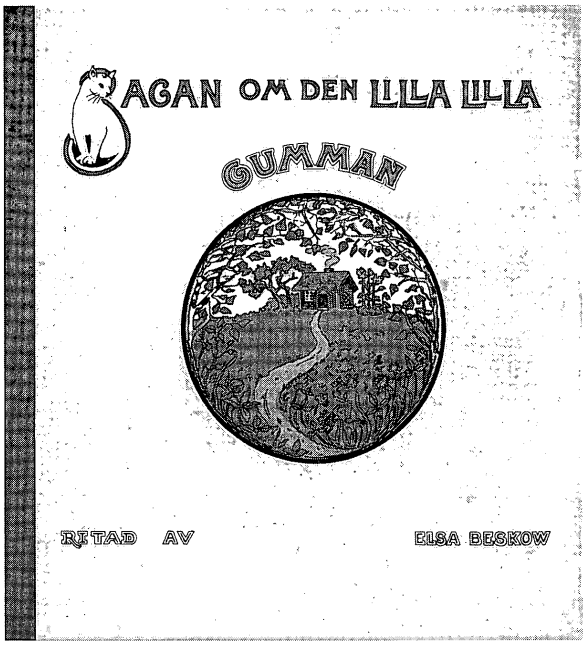


図1

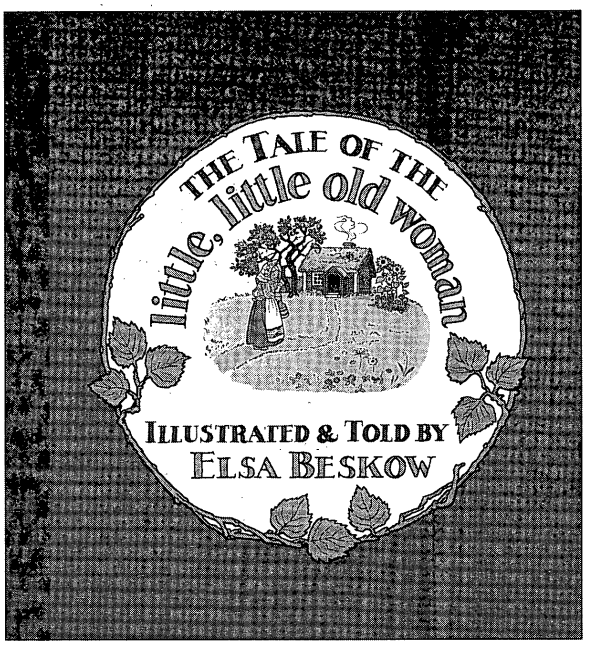


図2

図3

図4

図1，4．“Sagan Om den Lilla Lilla Gumman”より（スウェーデン語版）
図2．“The Tale of the little, little old woman”より（英語版）
図3．『ちいさな　ちいさな　おばあちゃん』より

図 5

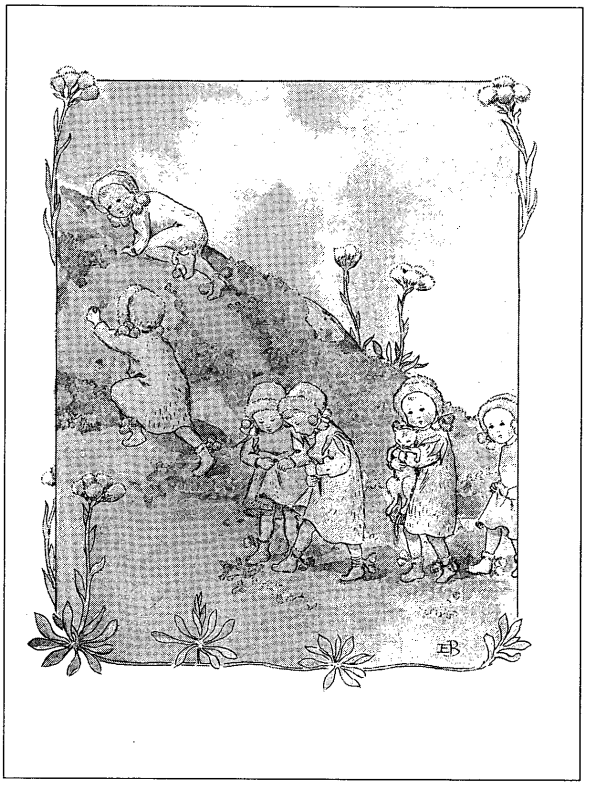


図 6

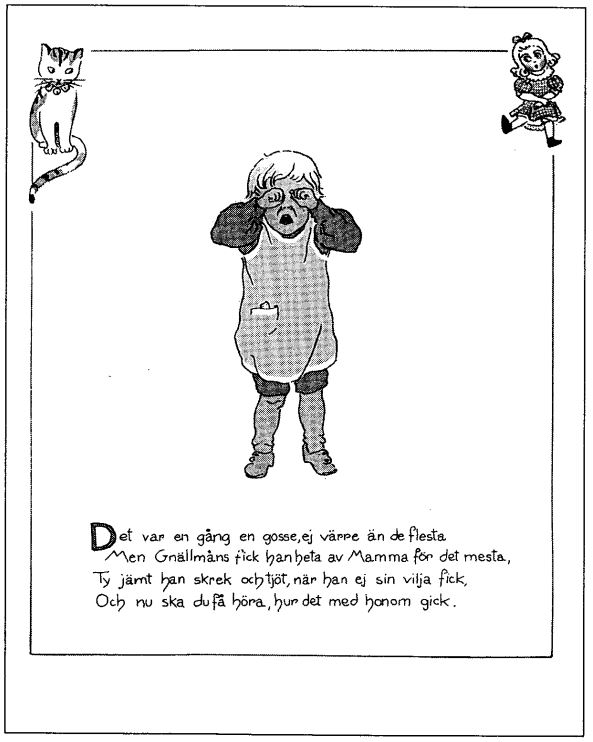


図 7

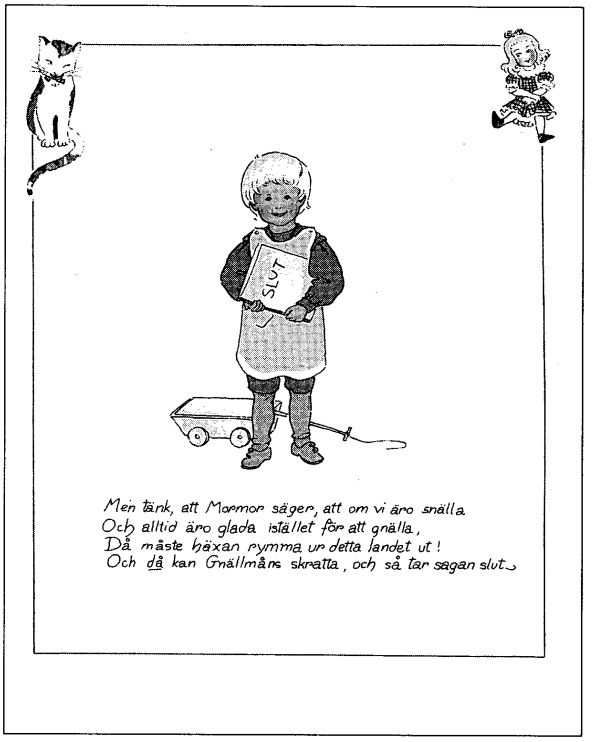


図 8

図 5．“Barnen på Solbacka” より

図 6．“Blommornas bok（花のうた）” より

図 7，8．“Gnällmåns（なきむしぼうや）” より

図 9

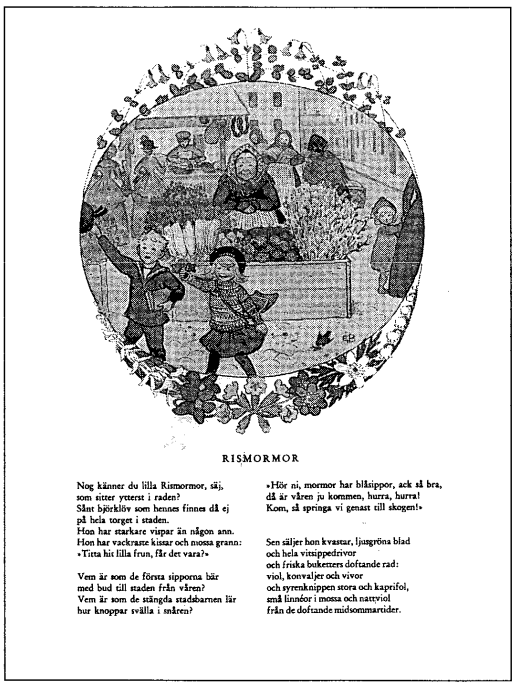


図10

図11

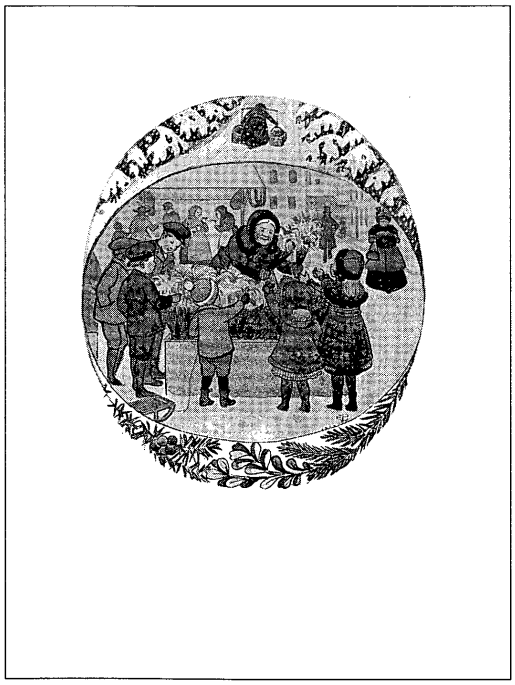


図12

図9．『ペレのあたらしいふく』より

図10，11，12．“Görans bok”より

図13

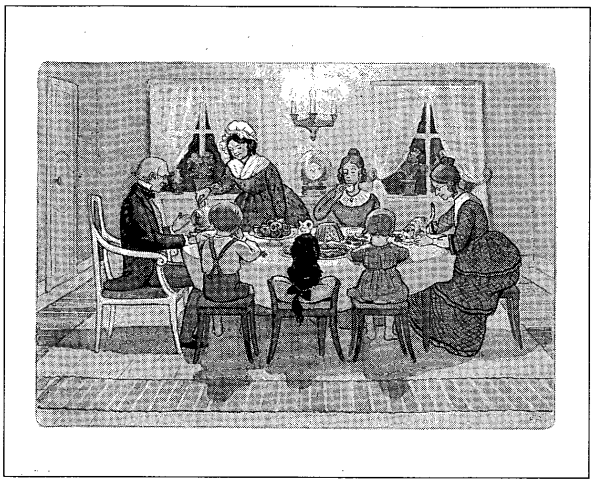


図14

図15

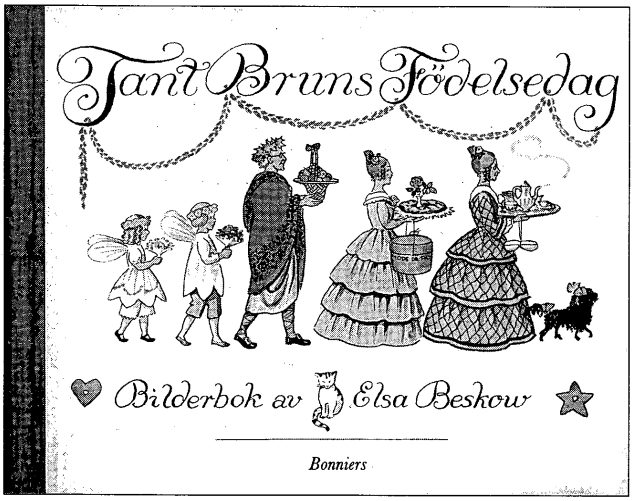


図16

図13, 14, 15.『みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさん』より
図16. “Tant Bruns Födelsedag (ちゃいろおばさんのたんじょうび)” より

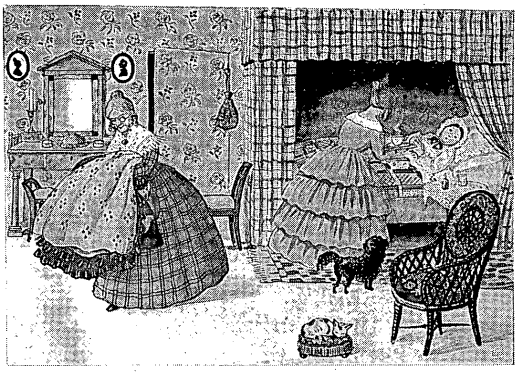


図17

図18

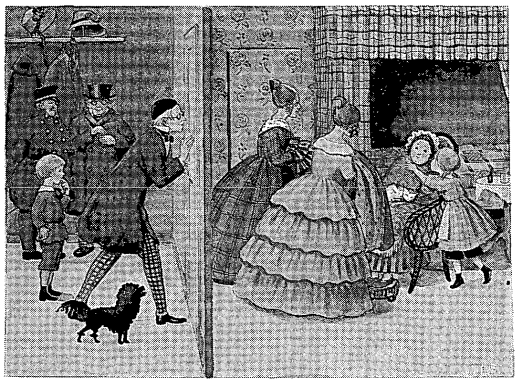


図19

図20

図17, 18, 19, 20. “Tant Bruns Födelsedag (ちゃいろおばさんのたんじょうび)” より

図21

図22

みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさんのおはなしをしっていますか？　エスメラルダというねこを、おぼえている人もいるでしょう。いぬのブリックとなかよしになり、ペッテルとロッタといっしょに、おばさんたちの家でくらすことになったあのねこです。

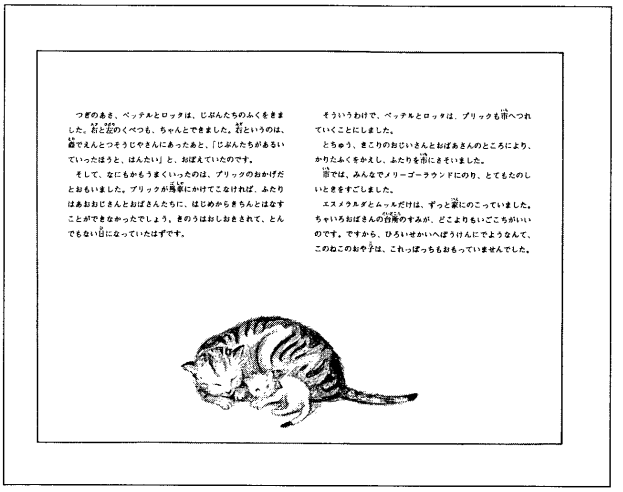
そのエスメラルダが、いまではすっかり大きくなって、3びきの子ねこをうみました。1びきは、しっぽのさきだけがくろいしろねこ、もう1びきは、しっぽのさきだけがしろいくろねこ、あとの1びきは、はいいろとしろのしまのねこです。なまえはムッル、クッル、ミッセ。なまえをつけたのは、もちろんペッテルとロッタです。

おばさんたちも子ねこはとてもかわいいとおもいましたが、みどりおばさんはいいました。

「庭にくることりたちに子をださないよう、エスメラルダをしつけるのはたいへんだったわ。うちでかう子ねこは、1びきだけにしましょう」

そこでペッテルとロッタは、ムッルをえらびました。ムッルはからだがしろいから、暗くなめてきれいにしてくれる、おかあさんねこがそばにいなくちゃと、おもったのです。

図23



つぎのあさ、ペッテルとロッタは、じぶんたちのふくをきました。若と若のくべつも、ちゃんとできました。若というのは、庭でえんとつそうじやさんにあったあと、「じぶんたちがあるいていったほうと、ほんたい」と、おぼえていたのです。

そして、なにもかもうまくいったのは、ブリックのおかげだとおもいました。ブリックが馬車にかけてこなければ、ふたりはあおおじさんとおばさんたちに、はじめからきちんとはなすことができなかったでしょう。きのうはおしおきされて、とんでもない目になっていたはずです。

そういうわけで、ペッテルとロッタは、ブリックも雨へつれていくことにしました。

とちゅう、まこりのおじいさんとおばあさんのところにより、かりたふくをかえし、ふたりを雨にさそいました。

雨では、みんなでメリーゴーラウンドにのり、とてもたのしいときをすごしました。

エスメラルダとムッルだけは、ずっと家にのこっていました。ちゃいろおばさんの指輪のすみが、どこよりもいごこちがいいのです。ですから、ひろいせかいへぼうけんにでようなんて、このねこのおや子は、これっぽっちもおもっていませんでした。

図24

図21. “Årets Saga（いちねんのうた）”より

図22, 23, 24.『ペッテルとロッタのぼうけん』より

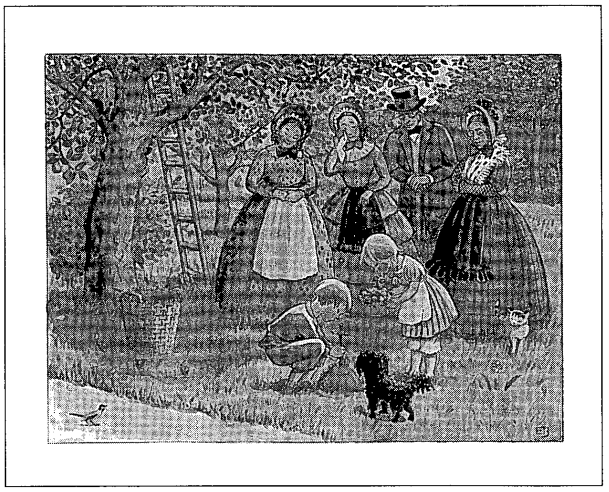


図25

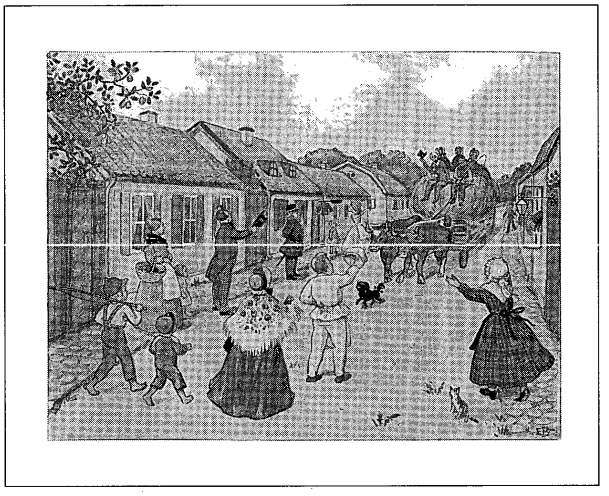


図26

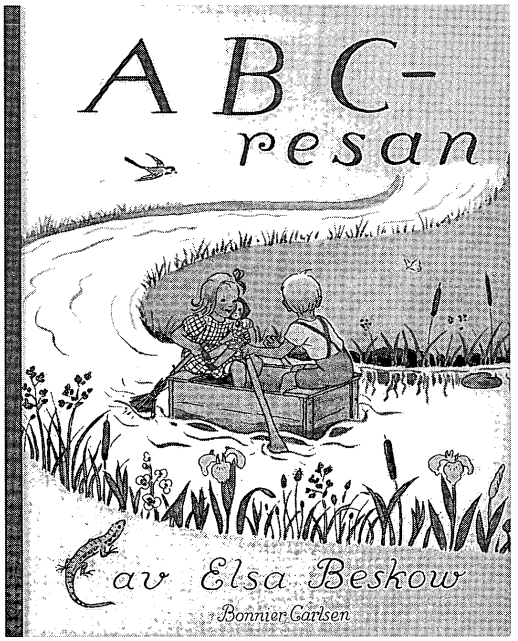


図27

図28

図25，26.『あおおじさんのあたらしいボート』より

図27，28.“A B C resan”より

図29

図30

図31

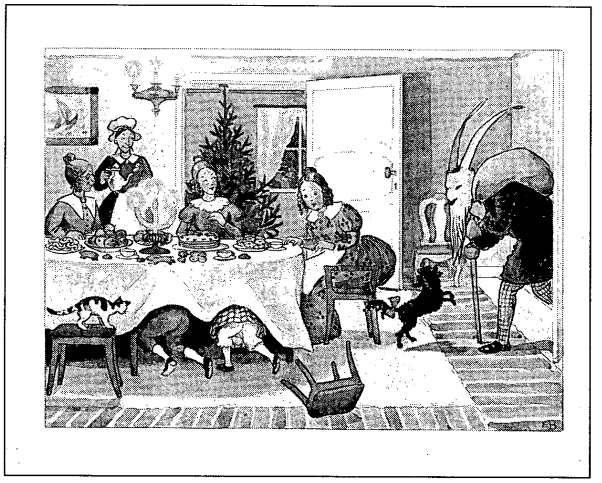


図32

図29，30，31，32．“Petters och Lottas Jul（ペッテルとロッタのクリスマス）”より

図33

図34

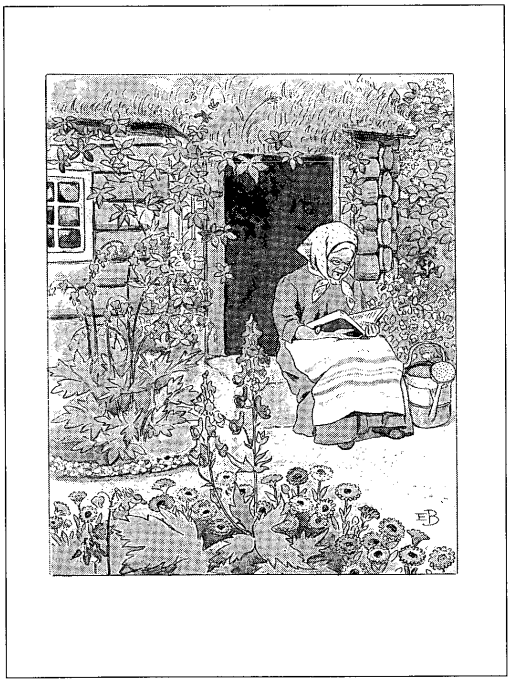


図39

図40

図33，34．“Petters och Lottas Jul（ペッテルとロッタのクリスマス）”より
図39．“Blommornas bok（花のうた）”より
図40．『ペレのあたらしいふく』より

写真35

写真36

写真37

図38

写真35，36，37，図38．“Elsa Beskow En BIOGRAFI”より

写真35．Johanna Wilhelmina Fahlstedt

写真36．Elsa Maartman 3歳

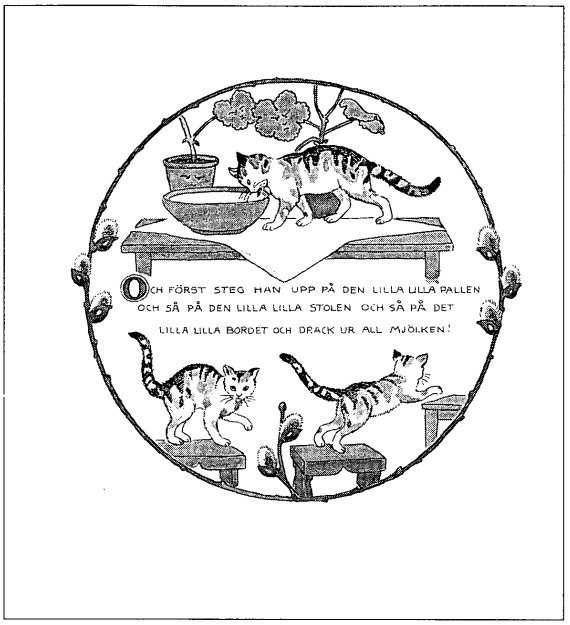


図41

図 4

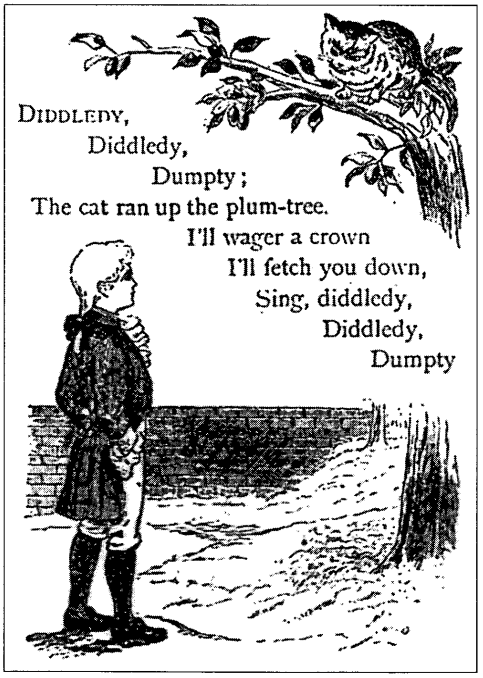


図42

図43

図41. "Sagan Om den Lilla Lilla Gumman（ちいさな　ちいさな　おばあちゃん）" より
図42. 『ルイザおばさんのわらべ歌の本』より（参考文献[5]）ヘズルウッド 画（1890年頃）
図43. "Alice's Adventures In Wonderland" より　John Tenniel 絵（1865年）
The Macmillan Alice